



癒しの空間としての動物園

小 松 守

(秋田市大森山動物園 園長)

大森山動物園に今年も冬がやってきた。冬ごしらえと正月明けからの「雪の動物園」の準備のため少しの間、お休みだ。

この時期の動物園はどこか不思議な静けさを感じる。それは、ところどころで物言わぬ動物たちの息づかい、命の力を感じるからだ。

静けさの中、ほとんどの動物は季節のリズムに合わせて坦々と営みを続けるが、中にはお客様との掛け合いを楽しんできたチンパンジーなどは、「どじえねなー（寂しい）」としょんぼり気味だ。静かな動物園を歩くとき、人と動物の関係性を改めて考えてしまう。

人は昔も今も動物と様々な感覚で向き合い関わってきたし、関わっている。人の画期的な活動の一つに動物を飼うことがあった。ある人類学者が人という動物は、唯一動物を飼うことのできる動物である、と表現したくらいだ。

動物の飼育は、人にとって大きな出来事であったのだろう。人の本能的世界の中で食を得るための手段でもあったが、決してそれだけではなく、人を創造的世界に広げ、高めることに極めて大きな役割を果たしてきた。

人は自分にはない審美的、芸術的な要素を動物に見出し、動物は人に生命の不思議を探求させる刺激も与え続けている。高度な精神生活を送る人が抱く恐怖心や寂しさを動物は軽減してくれる。動物を飼い、そばに置くことで心が和

み、癒されることを人は体験を通して発見してきた。

原始の人が最初に飼育した動物はオオカミであったようだ。原始の時代、夜の暗闇は人にとっての大きな恐怖、そこに付かず離れず存在したオオカミは闇の中でうごめく様々な動物の存在をうなり声で教え、あるいは追い払って人を守ってくれたのかもしれない。しだいにオオカミは人にとって大事な友に変わり、飼い慣らされ、やがてイヌになった。

人は動物との精神的なつながりを持つことで、安心し、心の拠り所にもなっていたに違いない。動物は人の安心という大事な部分を支えてくれる一つの重要なパートナー的存在になっていたのだろう。

私的な話で恐縮だが、ずっと以前、子どもたちがまだ小学生だった頃、我が家では二匹のネコを飼っていた。下の子どもが大人になってから私にネコの話をしてくれたことがあった。彼の話はこうだった。鍵っ子だった下の子は誰もいない家に帰るたび、鍵を開け家に入ると「ニャオ」と鳴きながら自分にすり寄り、迎えてくれたネコに大いに癒され、安心したものだ。大人になってからもネコのことを思い出すようだ。私たち夫婦は、それを聞いて子どもにすまないことをしたなと思いつつ、今はいないネコたちの顔を思い出しながら感謝している。

動物は物言わぬ存在だが、人の心に寄り添える何かの力を持っているように思えてくる。もしかして、それは人の中にあるのかもしれない。

人は自然と向き合い、時にその恐怖を味わいながらも、多様で豊かな自然に包まれ、癒され、生きている。多様な豊かさは癒しの要素の多様さとも言える。みどりあふれる森林などはい例である。

動物も人にとって重要な癒しの要素である。景色や植物とは異なり、動物は人と同じ意思を持ち動き反応し、心が通う存在である。人を襲う怖いものでは癒しの対象にはならないから、人は癒しを求めるために動物を飼い、馴らすことを始めた。

人に慣れた動物は、人と同じぬくもり感、柔らかさを提供してくれる。親密な関係にある家庭のイヌやネコのようにになると、人と動物が互いに関わり合い、求め合うことで、そこに信頼関係が生まれてくる。

人は生きる上で、根っこにある幼児体験、すなわち愛された幸せ感、悲しい時や辛い時に柔らかく、やさしく抱きしめてもらったぬくもり感、親と子の双方で育んだ愛着、信頼関係など、深い部分に安らぎや癒しを感じる。

人はペットや信頼できる動物との関わりの中で、知らず知らずに癒されている。柔らかなぬくもり感があるネコ、可愛らしいウサギ、心を通わせた互いの信頼で結ばれるイヌやウマなど、様々な動物が人を癒してくれる。

動物園の場合どうだろうか。大森山ではお客様にアンケート調査を行っている。来園目的のいつも上位にくるのが、動物とのふれあいや癒しである。

他園同様、大森山動物園も見学が主流である

ことには変わらないが、大森山来園の主目的にふれあい、癒しを取りあげているのは、大森山に来ると、どこか安らぎ、やさしい気分になれるからという評価の表れだと私は分析している。

ここ10年以上、大森山は「動物と語らう森」をテーマにした動物園活動を展開してきた。人と動物との間にあるバリアをできるだけ低くする工夫と努力を続けてきた。できるだけ人に慣れた動物を育てようともしてきた。対応できる動物には限度はあるが、動物により近く、可能なものはお客様と触れ合えることを大きな柱に据えている。

動物に接し、触れ合っているお客様の顔には一様に柔らかな笑みが浮かぶ。動物が発する独特の温かみ、柔らかさがそうさせているのだろう。

レッサーパンダなどの可愛い系の動物との出会いは、柔らかでかわいらしいものを守りたくなる人の中に潜在的に備わった気持ちを刺激し、心を和らげてくれるのかもしれない。

あくびをして眠りこけるサル、あったかい湯に入りほっこりするカピバラ、動物が見せるユーモラスな姿はお客様をリラックスさせる。

多様な動物と出会える動物園は、自然から距離が遠のく現代社会の都市にあって、手軽に自然と向き合える場なのだ。

そしてもう一つ、動物園に入ると人は動物の裸を見ているせいか、人は知らず知らずに解放的になるのかもしれない。他愛もない話題も出やすくなるだろうし、見知らぬ人ともフランクな会話に入りやすくなり、人の垣根が低くなる。

動物園は思っている以上に、人間性をリクリエートし、手軽に自然回帰できる空間かもしれない。